

手仕事に始まる工芸

平井 沙織

Saori Hirai

■はじめに

わたしは現在、刺繍によって装飾を施した布と金属を組み合わせた作品を制作している。布を取り入れ、金属だけではできない装飾を加えることにより、今までにない作品展開の可能性を模索していくためにこの表現方法へと至った。



無機質な金属の板や棒材などから有機的な立体をつくってゆく鍛金の工程、また刺繍も同じであるが、はじめから終わりまで同じ素材が手に触れ続けてものをつくりあげるといふことにわたしは手仕事ならではの喜びを感じる。

鍛金という伝統技法を私が学んできた上で現在の表現スタイルに至るまでを今までの自分の経緯をふまえ工芸の歴史などからも改めて考えてみる。

■鍛金について

鍛金とは、板状または棒状の金属を、それが持つ延展性を利用することにより、金槌や木槌などを使い打ち曲げ、絞り、打ち出し、かたちを形成してゆく技法である。

鍛金の技法は大きく二つに分けられ、ひとつは、古くから「打ち物」と言われ主に板状にした金属を、当て金を頼りにして形を成形してゆく技法で、鍛金技法の主流を占めるものとなっている。



焼き鈍し



絞り

「打ち物」が板金を錠絞技法によって成形されるのに対して、もうひとつは鍛冶ともよばれる「鍛造」の技法である。鍛造は丸棒や角棒になった、塊材を主に使用し、火造り(熱間加工)によって成形され、鉄を加工する際に多く用いられる。



コークス炉



鍛造

鍛金の歴史は古くから続いており、農具に始まり茶器や花器などの伝統工芸品にまで発展をした。生活に密着するもの、日常使いの道具、そこには実用的な「用」芸術的な「美」が常に要求されてきた。つまり、私たちの日常生活の文化とも密接なつながりを持ちつつ発展してきたといえる。

■これまでの経緯ー1

鍛金の基礎技法を習得する為伝統的な技法「絞り」を用い花器と鍋を制作した。鍛金に限らず工芸は自分の思い描く形をつくるための技術も必要となってくる。

花器や鍋など普段使いの物は装飾美だけではなく機能美も備えさせなければならない。花器は絞り技法の一番初めの課題であったため、回転体であるもっとも基本的なかたちのものを制作したが 鍋に関してはデザインから図面をおこし、制作までを行った。日常使いのもの、食べ物や飲み物を加工するものとして持ちやすさや、洗いやすさなどを考慮し制作した結果、大変使いやすく生活空間とも調和するものとなった。しかし、「用」のみにかたより、手仕事だからこそこできる自由な装飾的要素が感じられないものとなっている。



鍋 φ130 W250×H100

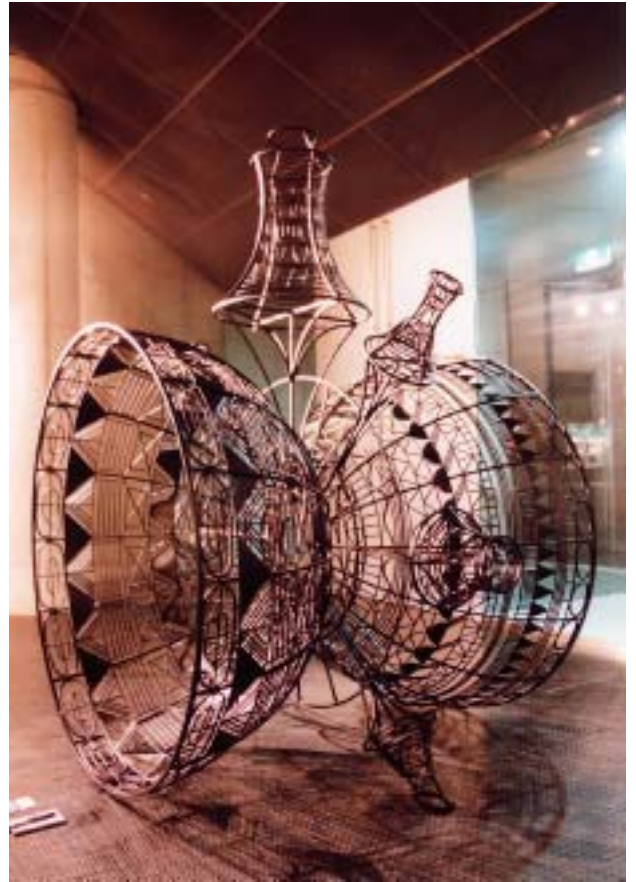
生活空間と交わるものとして、あまりにも華美でありすぎたり装飾的であったりしてはならない。しかしその中で工芸美というものを表現してゆかなければならない。

■これまでの経緯ー2

卒業制作では線材で構成されるスクリーンを制作した。ただのオブジェとしてではなく大学のエントランス空間に光や影で変化を加え、見慣れた日常空間で足を止めてもらうことにより、そのよさをあらためて感じてもらうことを狙いとした。



卒業制作



素材:鉄 W2100×H2300×D1600mm

形態は無機質であるエントランス空間との調和も考慮し、幾何形体をベースとした有機的な表現を目指した。

鍛金の伝統的な技法はほとんど使わずに一つ一つのパーツを溶接することにより、制作を進めていった。自分のデザインしたものを、自分の能力を最大限に活かし、コツコツと自分が気の済むまで手を掛けた。精神的、肉体的に苦しい期間もあったが、結果として喜びや達成感を心から得ることができ、また自分ならではの表現方法を見出せた作品となった。

■幾何学文様について

幾何学文様の起源は西アジアといわれ、幾何形態を基本とする単純な繁ぎ模様は、世界各地で生み出され、どこかの原始社会でも見られる文様となっている。

発生の根源としてはなにげなく描かれた線や点が始まりといえる。それは人類共通の装飾本能によるものである。

日本では最も文様らしいものが現われるのは縄文時代である。人の爪や貝殻、縄目など自分達の身の回りにある原始的な道具を使った簡単なものから、火焰土器に見られるようなエネルギーに溢れる表現など、様々なものがつくり出された。幾何学的にパターン化された文様から、後に家紋のデザインや、唐草模様などの日本の伝統的な装飾も生まれてきた。

卒業制作から今現在まで、私は幾何学文様をデザインのテーマとしている。土器や曼荼羅などを特に意識しているわけではないが、点や線の無限に存在する組み合わせは自分にとっても大変興味深い。

単純だからこそ無限に生まれてくる。また、紙の上だけではなく、素材を変えれば印象も変わり、立体で表現することにより前後の関係、重なりなどでさらに新たな文様が見えてくるのである。

■これからの方向性

長年使っていた皮の財布が壊れてしまった。私はふと、そこで新しいものは買わずに自分で作ろうと考えた。実際私は左利きであるため市販の財布では使いづらいと日々なんとなく感じていたからだ。自分の使いやすいように、以前から不便だと思っていた小銭入れとお札入れの位置を逆にして、表の柄も自分の好きな柄を刺繍した。当然であるが、完成したものは今までで自分が最も使いやすく、愛着の持てる物となる。



工芸はそのような考えからきっと始まったのだろう。身の回りの道具を作ることから始まり、生活空間を豊かに彩るために美しい伝統工芸品が生まれてくる。私が椅子や財布を作ろうと思ったのは、鍛金を学び身の回りのものを作るという過程がありその発想にたどり着いたのかも知れないが、決してそれだけではない。作るという発想は人々が生活していく上で誰もがもっていなければならない最も人間的な発想なのだ。

近年、科学技術の発展や経済状況の変化に伴い、金属工芸品に限らず私たちの身の回りをとりまくものの発展はめざましい。わたしたちの身の回りには機械により大量生産されたものであふれている。作らなくても必要としているものが簡単に手に入る現代社会の中で、作るという発想が消えていってしまうのは仕方がない。

しかし機械によらなければならないものがあるとともに、機械では生まれられないものも数々ある。それはいつの時代においても変わらない。それならば、ただやみくもに伝統工芸を守ればいいのか？決してそういうわけではないと私は考える。大事なことは今の時代、また自分の置かれた状況において良いものが何であるか、

また必要とされているものが何かを見極めることが大事である

人の手で作ることはとても時間がかかる。だが人の手で作られたものはその苦勞の中に自由と責任が宿る。自然が私たちに与えてくれた手という道具を使い、機械では決してできない、人の手によって作られる有機的な要素を持つ作品をこれからも制作していく方向だ。そしてそれらを作ることにより量産品の溢れる社会の中で改めて手仕事の必要性、またそれによってつくられるもののありかたをより多くの人々に感じてもらえればと私は強く思う。



「水母」素材：鉄・布・毛糸



椅子 φ300×H600
テーブル φ450×H700

参考文献

- ・柳 宗悦 「手仕事の日本」岩波書店
- ・石川充宏 「金属の工作工芸」開隆堂
- ・山下恒雄、石川充宏、安藤 泉
「鍛金の実際」美術出版社
- ・視覚デザイン研究所
「日本・中国の文様辞典」